やはり俺が初音島でラブコメするのはまちがっている。

sun- sea- go

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺ガイルのキャラがＤ．Ｃ．２の世界にいたら。という話しです。

Ｄ．Ｃ．２の女性キャラは出す予定は今のところありませんが、杉並と渉は出す予定です。

初投稿なので至らない所も多々ありますが、よろしくお願いします。

目次

Vol.1 ―― 1
Vol.2 ―― 19
Vol.3 ―― 31
Vol.4 ―― 52
Vol.5 ―― 72

Vol.1

夢を見ていた。
それは夢だと分かっているのに、妙にリアルなその光景は不思議な感じだった。
隣には、幼馴染みで同級生の由比ヶ浜結衣が俺の腕を絡めている。
は……？
いやいやいやいや‼
何やってんのこの子は?!
いくら夢の中でも、こんな勘違いしそうな行動は即刻止めて頂きたい！
うっかり好きになって、告白なんてしちゃって、振られちゃうまである！
振られちゃうのかよ……。
『えへへ～。ヒッキー、ヒッキー♪』
結衣は嬉しそうに笑って、俺を見上げてくる。
なに？なんなの？この超かわいい子。

てか、ヒッキーは止めなさい。引き篭りじゃないからね？
比企谷八幡だから、ヒッキーって実際どうかと思うんだ。
俺は結衣の顔を見る。
幼さの残る整った顔立ち、目はくりっとした愛らしいパッチリアイ。
結衣のトレードマークのお団子頭からちょろっと出したテールが風に靡く。
そして、仄かに香る柑橘系の甘い香り。
……香り？
おかしい！これは夢だ！
いや、夢なのは分かってるんだが、妙にリアルっぽいんだよ。
ほら何？結衣が俺の腕にしがみつくようにしてるもんだからね、その大きくてたわわな二つのメロンちゃんが、当たってるんですわ……。
凄く柔らかいくて、暖かいんですわ……。
つーか、夢なのに何で柑橘系の香水の香りがするん？
夢。夢か……。
夢って事はさ……？何してもいいのかしら？
俺は結衣の顔チラッと見ると、結衣も頬を少し赤くして俺を見つめていた。
『……』

『……』

無言で見つめ合っていると、不意に結衣は目をそっと閉じて俺に顔を寄せてくる。

「……ヒッキー」

「……結衣」

俺も目を閉じて、結衣に近づこうとした瞬間……。

スバーン!!と、俺の後頭部に衝撃が走った。

「ふがっ!!」

驚いて身体を上げる。

寝呆けてるせいか、視界が霞がかっているが、徐々に視界がクリアになってくると、ここが何処だか分かってきた。

自分の家の自室でした。

ベッドにうつ伏せで寝ていたらしい。

衝撃があった後頭部を軽く擦りながら、視線を動かす。

そこには見た目が中学生ぐらいの亜麻色の髪をした女の子がスリッパを握りながら、眉をピクピクさせながら笑っていた。

「あ、いろはさん。おはよーございまふ……」

「おはようハチくん」
ああ。あれで後頭部をひっぱたかれたのね……。
スリッパで頭ひっぱたいて起こすって……。
寝起きのせいか、呂律が上手く回らずボーっといろはさんを見上げる。
一色いろは。
年齢不詳。
俺の保護者であり、親代わりみたいな存在だ。
綺麗な亜麻色のショートボブの髪。少し幼い顔立ちにフワッとした印象を持つが、それがあざとく感じてしまう。
何故か俺の通う風見学園高等部の校長をしている。
趣味はお菓子作りだ。
そういや、この人ホント幾つになるんだ？
出会った頃と全然体型とか変わらないし、見た目も髪型以外変化がないような……。
俺がまだ4歳だか5歳ぐらいの頃に、本当の親に捨てられた俺は、いろはさんに拾われたらしい。
『らしい』とは俺があまり記憶にないからだ。

記憶があるのは、真冬で雪が降っているにも関わらず、大きな桜の木が満開に咲いていて、空から舞い降りる粉雪と桜の花びらが綺麗で、気が付くと目の前にいろはさんが微笑んでいた事ぐらいだった。

「随分といい夢を見ていたみたいだね？ハチくん」

「……な、なんのことでしょうかね？」

夢の内容を思い出し、恥ずかしくなった俺はいろはさんから視線を反らす。

「寝言で結衣ちゃんの名前を言ってたよ？幸せそうに。だからつい『イラッ☆』とき て、つい履いていたスリッパで起こしてあげたんだ。感謝してね♪」

あざとくバチコーンとウインクを炸裂させるいろはさん。

てか、イラッ☆じゃねーよ！今のウインクに俺が『イラッ☆』としたわ！俺は悪くないのに、ひっぱたかれたのかよ!?

ジト目でいろはさんを見る。

「そんな腐った魚みたいな目で睨まないでよぉ～」

「……はぁ、普段から腐った目をしててすみませんね」

「まったく……。子供の頃は綺麗な澄んだ目をしていたハチくんが、何でこんな腐った目になったんだか……」

よよよ……。と、口を手で押さえ泣き真似するいろはさん。

その姿はどう見ても、女子中高生のあざとさ全開『わたし超可愛いアピール』だった。

「いや、ホントあざいんで勘弁してください……」

「むっ。あざとくないもん！むしろ、ハチくんの方があざといもん！」

「は？ぼっちの俺が、そんなムダアピールしてどうするんですか？」

まぁ、小学校、中学校と色々他人の悪意に晒されてきた俺だからな。

俺はカーテンを開け、外の景色を見る。

外は満開の桜。なのに今は１２月半ば。

なんなのコレ？普通、桜って３月下旬からの短い期間だけだったよね？馬鹿じゃん初音島。

俺、比企谷八幡の住むこの『初音島』は、一年中桜が枯れない島として全国的にも有名だ。

島の形は三日月型をしていて、東西に伸びている。

島の東側は主に大学や研究施設、大きな総合病院などがある。

島の中心部は、島で一番大きい『桜公園』があり、公園の最奥には一際デカイ『枯れない桜』がある。

俺といろはさんが出会った場所だ。

桜公園を中心に、放射状に住宅街が広がっていて、俺の家もそこにある。住宅街の中には、小学校も中学校もある。

島の西側は、商店街やテーマパークなどがあり、俺の通う『風見学園』もここにあるのだが、どちらかと言えば島の中心部より、やや西側に位置している感じだ。

「早く顔を洗って支度しちゃいなよ？わたしはもう出るからね。遅刻しないように！」

「へーい」

そう言うと、いろはさんは可愛く敬礼をかまし、ついでにウインクをキメて部屋を出ていった。

あざとい……。

目覚まし時計を見れば、６：３０を回った所だった。

「学校の偉い人も、こんな朝早くから仕事行くのか……。やっぱ社会ってゴミだわ……」

ブツブツ文句を言うと、身体が冷えてきた。

俺はさっさと制服に着替え、洗面所に向かい顔を洗う。

顔を洗ってキッチンに入り、朝食の用意に取り掛かる。

朝食が出来上がると、それを見計らったかのようなナイスタイミングで、玄関か

らアホっぽい声が聞こえてきた。

「やっはろー!ヒッキーお腹すいたぁー!」

バタバタと足音をたててキッチンにやってきたのは、お隣さんで幼馴染み、ついでにクラスメイトの由比ヶ浜結衣だった。

結衣と俺は同じ高校一年生で、何故か今まで別々のクラスになったことがない。小学校一年生からずっとだ。腐れ縁にしたって、何か陰謀めいたモノを感じずにはいられない。

「あー!今朝もトーストに目玉焼きじゃん!ヒッキー手ぇ抜き過ぎだし!」

「うるせぇよ。だったら、純一さんか雪姉に作って貰えばいいだろうが……。毎朝何でウチで食うんだよ?」

「え?だって、お爺ちゃんは『かったるい』って言ってやらないし、お姉ちゃんはクリスマスパーティーの準備で生徒会に朝早く出掛けちゃったし……」

結衣の家は、祖父の純一さんと結衣の従姉妹で、一つ年上の雪ノ下雪乃の三人で暮らしている。

彼女の父親は東京へ単身赴任していて、年に数回帰ってくるだけだ。

母親は、俺達が小学二年生の頃に重い病に侵され亡くなってしまった。

「お前が作るって言えば、純一さんの重い腰も上がると思うけどな」

俺はリビングのテーブルに二人分の朝食を並べながら気だるそうに言うと、結衣は頬を「むー」と膨らませた。

「どういう意味だ！あたしだって、やれば出来るんだからね！馬鹿にしすぎだし！」

テーブルにバン！と手を打ち、お怒りの様子の幼馴染みを横目に俺はトーストにジャムを塗って言ってやる。

「そういうセリフは、人がまともに食える物を作れるようになってから言えよ？何でクッキー作ろうとして、ホームセンターで売ってるような木炭が錬成出来るのか不思議で仕方ねぇわ……」

おまけに、胃薬を標準装備せねば翌日までトイレに篭らざる得ないとか、どんだけ重い罰ゲームだっての……。

お陰で雪姉が学校の用事とかでいない時は、俺が嫌でも飯を作るハメになる。

「ふんだ。そのうち『美味しい！』って、言わせてみせるからね！」

結衣も椅子に座り、トーストにジャムを塗りながら文句を言ってきた。

「いつの日になるのやら……」

しばらく無言で朝食を食べていると、結衣がぽしょっと言ってきた。

「……ねぇ、ヒッキー。やっぱウチに戻ろうよ？」

「あん？なに言ってんだ？純一さんに、ああ言われちまったんだからコッチに来るしかねぇだろ？そもそも、俺はこっちの家の人間だぞ？」

今年の春休みだから、もう9ヶ月も前のことだ。

俺は由比ヶ浜家に、結衣達と暮らしていた。

俺は親代わりのいろはさんに拾われた後、何かと多忙だったいろはさんは俺の面倒をみられなかったらしく、お隣で仲の良かった純一さんに相談したら、由比ヶ浜家で俺の面倒を見てくれる事になったらしい。

そういう事で、俺は由比ヶ浜家に約10年ぐらい住んでいたのだが、高校に上がる直前に純一さんから「お前たちも、もう良い歳になるから一緒に住むのは何かと大変じゃないか？」との事で、その翌日に俺は隣の一色家に引っ越しをしたのだ。

まぁ？トイレに行こうとドアを開けたら結衣が使ってたり？

風呂に入ろうとしたら、結衣が入ってたり？

エッチなサイトを観ているときに、いきなり結衣が「やっはろー！」と元気に入ってきたり？

おい。全部、結衣絡みじゃねーか！ふざけんな！

不思議な事に、雪姉に関してはそういった、ラッキースケベ的な展開はなかったような……。

まぁ、そんな色々思い当たる節が多々あったので、俺も納得した上での引っ越しだったのだが、約一名だけ未だに納得してない奴がいる。
俺はチラッと結衣をみる。
「そう……なんだけどさぁ……」
結衣はフォークで目玉焼きを突っついて、面白くなさそうにしている。
「んな事はいいから、早く食べちゃえよ。もう７：３０になるぞ？」
「あ、うん……」
そう言うと、結衣はいじっていた目玉焼きを食べ始める。
そんな結衣を見ながら、俺も残りのパンや目玉焼きを口に放り込んだ。
朝食が済んで、玄関を結衣と一緒に出る。
鍵を掛けて、「ほれ」と結衣に弁当を渡す。
「あ。お弁当！ヒッキーいつもありがとね！」
さっきまでの不満顔も一転して満面の笑顔を見せる。
不覚にもドキッとしてしまう。
こいつとは子供の頃から姉弟みたいに育ってきたんだ。
血の繋がりは無いけど、それこそ本当の姉弟みたいに純一さんもいろはさんも、俺達をここまで育ててくれた。

だから、結衣や雪姉に恋愛感情なんて持てる筈がない。
今朝の夢？
あんなのは俺が見たくて見た夢じゃねぇんだから、ほっとくに決まってんだろ。
弁当を受け取った結衣は、嬉しそうに鞄に弁当箱を入れて俺の手を引っ張る。
「じゃあ、しゅっぱーつ！」
「いやいや！なに人の手を勝手に引っ張ってんだよ！は、離せっつーの！」
「いーじゃん、昔もこうやって手を繋いで学校に行ったんだし」
こちらへ振り返り、ニコッと微笑む結衣に俺は何も言えず、あさっての方を見て「勝手にしろ」としか言えなかった。
ああ！熱い！顔が熱い！
「えへへ。ヒッキー顔が真っ赤だ」
そういう結衣も、ほんのり顔が桜色に染まっていた。

結衣と手を繋ぎながら、歩いて行くと桜並木に差し掛かった。
この時間帯は登校するにしては早すぎるぐらいなので、周りには人がいない。
女の子と手を繋いで学校に来たなんて噂が立てば、俺が気にしなくても結衣が気の毒に思う。

俺みたいなぼっちで捻くれていて目が腐った男と、誰にでも優しくて気が遣えて、美少女と言っても過言ではない結衣。

端から見れば……と言うか、本人視点から見ても釣り合いがとれていない。

俺は小学校低学年の頃から、高校生になった今でも、ずっと独りだった。

友達もいなければ、話し相手なんて家族ぐるみで付き合いのある由比ヶ浜の家の連中といろはさんぐらいなもんだ。

まぁ、独りになった理由は多々あるが、強いて言えば俺が皆から嫌われるようにしただけだ。

今も手を繋いでる結衣や雪姉にも俺から遠ざけるために、わざと嫌われるような行動をしたことが何回かある。

でも、結衣も雪姉も何故か離れてくれなかった。

学校では俺に気を遣って、結衣から話し掛ける事は、あまりないが。

「なぁ、この桜並木過ぎればすぐ学校なんだから、手、離して欲しいんだけど……」

「あ、うん……」

そう言うと、結衣は残念そうに俯いてしまう。

いや、そんな捨てられた子犬みたいな顔されたら、こっちは罪悪感すごいんだけど……。わざと？

桜並木を少し進んだ所で、結衣がピタッと足の動きを止めた。
結衣と手を繋いだままの俺も、同じように足を止めてしまう。
「どうした？気分でもわるいのか？」
俺が言うと、結衣は首をブンブンと横に振る。
「ヒッキー……。あたしさ、今朝すっごく幸せな夢見たんだ」
「は？」
なんだ？
いきなり今朝見た夢の話しなんかして……。
困惑する俺に、結衣は俯いたまま話しを続ける。
「その夢はね、とっても幸せなんだけど、同時にすっごく悲しくて切ない感じだったんだ……」
すごく幸せな夢なのに、すごく悲しくて切ない夢？
「あたしさ、後悔したくないんだ……」
俯いた顔を上げ、俺の顔を正面から見据える結衣。
「いや、お前が何を思って後悔したくないと思ってるのか判らないんだが……」
ホントに訳が分からなかった。突然、今朝見た夢の話しをしたかと思えば、後悔したくない宣言。

「いいの。ヒッキーは判らなくても。でも、これだけは言っておくね？」
そう言うと、結衣は両手で俺の右手を握り、真っ直ぐな目で告げた。
「もう、中学の頃までみたいなヒッキーに守ってもらうだけの存在は嫌だから、ヒッキーが被った犠牲の上にある幸せなんて、絶対に間違ってるもん！」
「……っ！」
その瞬間、俺は金縛りにあったみたいに固まってしまった。
結衣は子供の頃から、周りの空気に敏感で他人に合わせていないと不安になってしまう女の子だった。
そのせいで、彼女の友達から八方美人だの何だのと言われていた時期があった。
結衣は段々塞ぎ込むようになってしまい、家でもご飯を残すようになってしまった。
そんな結衣を見て、俺は自分自身に苛立ちと後悔がない交ぜになり、クラスの連中を馬鹿にする発言をするようになった。
特に結衣に攻撃していた女子に対しては言いたい放題だ。
そんな事をすれば、当然結果はクラス内からのバッシングの嵐。
こっちが向こうの主張を論破すれば、あの手この手と俺に苛めに走ってきた。
俺の体操服や下駄箱にある靴を隠されるのは当たり前。たまに、落書きやカッ

ターで切り刻んであったりもした。
教室で使っている自分の机の引き出しを開ければ、そこはカエルの墓場と化していたり……。
いや、あれはマジでびびったわ……。
だが、その甲斐あって結衣の友達からは、結衣を非難する声が聞こえなくなっていた。
俺がクラスの悪者になれば、結衣にかかる火の粉は全部俺が引き寄せられた。
俺は別にどうなっても良かった。陰で隠れて嫌がらせしている連中となんか、頼まれたって友達になんかなりたくない。
俺が友達と信じて疑わなかった奴等も、一緒になって俺の靴や体操服に悪戯していたのを偶然見た時は、さすがにショックだったっけ……。
だから俺は、他人に何も期待しなくり、信じて裏切られて傷付いて誰も見てない所で泣くぐらいなら、誰にも縛られないスクールライフを送ろうと決めたのだ。
そうと決めたからには、結衣や雪姉には悪いとは思ったが、悪者の俺の側にいたら、こいつらも悪者にされかれない。
だから俺は、二人を遠ざけようとしたのだが、二人はどんなに俺が冷たくあしらっても決して離れてはくれなかった。

「だから、ヒッキーがまた冷たい態度をとっても、あたしは絶対に離れないよ！」
結衣は、ぎゅっと両手で俺の右手を握りしめる。
「す、好きにしろよ……」
プイッと顔を反らす。
「大丈夫だよヒッキー。怖くないよ」
「え？」
結衣に視線を戻すと、何故か結衣は優しく微笑んでいた。
それからは、たわいもない話しをしながら校門まで手を繋いで歩いて行くと、よく見知った人が門柱に寄りかかって立っているのに気が付いた。
「あ、お姉ちゃーん！やっはろー！」
結衣は俺と繋いでいる方の手をブンブン振りまわす。
お願いだから、恥ずかしいからやめて！ほら、登校してくる奴等の視線を集めてるから！
結衣は俺を引っ張るように走り出した。
「おはよう結衣。八幡もおはよう」
綺麗な黒髪のロングヘアー。整った顔立ちに凛とした瞳にキリッとした眉。
結衣と比べてれば、かなり慎ましい胸の年上の美少女。

雪ノ下雪乃。
眉目秀麗、成績優秀、おまけに風見学園高等部の生徒会長。
弱点らしい弱点がないように思えるが、彼女は運動神経は悪くないが、いかんせん体力がない。
校庭一周するとマンボウみたいな顔で口をパクパクさせ、呼吸困難に陥るほどに体力がない。
あと極度の負けず嫌いで、挑発にはすぐに乗っちゃう。
「うっす。雪姉こんな朝早くから校門で何やってんの?」
「あなた達を待っていたのよ」
肩に掛かった長い艶のある黒髪を払い、ふっと微笑みながら雪姉は言う。
「あたしとヒッキーに?」
「ええ。生徒会の仕事を手伝って欲しいの」
生徒会の手伝い……。
嫌な予感しかしないよなぁ……。

2へ続く。

Vol. 2

生徒会の手伝い……。
つまりそれは、タダ働きって事だ。
冗談じゃない。
只でさえ働きたくなくて、将来の希望職種に『専業主夫』と書いたのに、タダ働きの上に絶対厄介な仕事を押し付けてくるに決まってる！
タダほど怖いものはない。
ここは逃げるのが得さ……
「お姉ちゃん。手伝って何するの？」
結衣は可愛く小首を傾げ、雪姉に聞いていた。
ちょっとガハマさん！少しは警戒しなさいって！
ほら今一瞬、雪姉が「ふっ。釣れたわ」みたいなドヤ顔したの見てたからね！
これ絶対厄介な仕事だ！
「簡単な事よ。ある二人の男子生徒をクリスマスパーティーの準備期間中、監視していて欲しいの。勿論、パーティー当日もよ」

「え？だ、誰を見張るの？」
「二年の板橋渉くんと杉並くんの二人よ」
雪姉は溜め息混じりに言う。
板橋先輩と杉並先輩……。
この学校にいて、この二人の名前を知らない者はいない。
風見学園高等部は、昔から何故かイベントの多い学校らしい。
春の新入生歓迎パーティー、体育祭、秋の文化祭、クリスマスパーティー、そして卒業パーティーとイベントが目白押しだ。
そのイベント毎に毎回、暗躍しているのが板橋先輩と杉並先輩の二人なのだ。
前回の文化祭では、売り上げナンバーワンのクラスには、豪華賞品が生徒会から贈呈されると聞けば、板橋先輩はエレキギターとアンプを持ち出し、他のクラスの催し物の前で、これでもか！ってぐらい馬鹿デカイ音量で演奏したり、杉並先輩は口コミを利用して、他のクラスの評判を軒並み落としにかかり、ちゃっかり自分のクラスに客を招き入れていた。
しかも、何が凄かったって杉並先輩たちのクラスの中に入ったら、キャバクラみたいな接待をされたことだ。
超爆乳の人や、銀髪ロリっ娘の先輩方がエロいパジャマで接待していたのだ。

ああ……。あれは最高でした！
またやってくんないかなぁ……。
爆乳先輩とロリっ娘先輩に、また挟まれたい！
なんて願望をしていると、隣と正面からから突き刺さるような視線を感じた。
「ヒッキー？なんか、いけないこと考えてるよね？」
「八幡？まさか文化祭の時みたいにノコノコ杉並くんに着いていって、また御相伴に預かろう。なんて考えてないわよね？」
え?!何で俺の考えてる事が分かるの？怖ぇよ！
二人とも笑顔だった。
笑顔なのに目元は鋭かった。
こういう接待は遠慮させてもらいます。
「べ、べべべべ別に何も考えてねーし……」
二人の笑顔が怖すぎて、どもっちゃうのは仕方ないよね！
プイッと顔を反らす。
「はぁ～…。あなた、あのキャバクラ擬きで遊んでいたことを全く反省してないようね？」
溜め息を吐いたあと、雪姉は絶対零度の視線を俺に向けてきた。

約二ヶ月前の文化祭。

杉並先輩の口車に乗せられた俺は、例のキャバクラ擬きに案内され、爆乳先輩とロリっ娘先輩の二人に接待されていたのだが、突然、教室のドアが勢いよくバーン！と開くと生徒会役員の連中がワラワラ入ってきたのだ。

怪しい商売しているクラスがあると生徒会にタレコミがあったらしく、生徒会オールスターで家宅捜査に乗り出したらしい。

勿論その中に雪姉もいたわけでして、見つかるとヤバイ事になるのは火を見るより明らかだし、さっさと逃げようと、こっそり気配を消してステルスヒッキーになり教室を出たのだが……。

何故か廊下に結衣が仁王立ちしていた。

後から聞いた話しでは、杉並先輩に声を掛けられた俺を見ていた結衣は心配して後を付けていたらしい。

余計な事を……。

それから家に帰ってからが地獄だった……。

結衣には散々、馬鹿だのエロだのキモイだの罵倒を浴びせられ、雪姉に至っては、約三時間も正座させられ、気持ち悪いだのエロ谷だの言われ、挙げ句の果てには本当に通報しようとしていたのだ。

「そ、そんな事より杉並先輩と板橋先輩だろ？」
身の危険を感じた俺は、強引に話しを戻す。
「ヒッキー、怪し過ぎるし……」
「強引な話題転換ね。でも、もしもまた同じような手口で、あんな如何わしい場所に行くのなら覚悟なさい？前は三時間程度のお説教だったけど、次は一晩中お説教になるわよ」
にっこりしながら『お説教』と言っているが、あれはお説教と言うより拷問だった気がするんだよなぁ……。
あれを一晩中やられたら、もう死んじゃうよね？
「は、はい。気を付けま……」
「ふあーはっはっはっ!!久しいな、比企谷八幡！」
突然、背後から高笑い聞こえてきた。
振り返ると、ニヤッと口の端を吊り上げた杉並先輩が俺を見ていた。
「ふふ～ん。相変わらず、その他人を拒むような腐った目は素晴らしいぞ！同士比企谷！」
「いや……。俺、先輩の同士になってないですからね？」
こんな学校側から目をつけられるような目立つ人とは関わりたくないです。

怪しく鋭い目付きに、挑発するような不敵な笑い。
身長は１８０ｃｍぐらいあり、スラッとしている。
普通にしていればモテそうなのに……。
「ふっ。何を言う、同士比企谷！我々は、あの日あの時あの場所で将来を誓った仲ではないか！」
「何をワケわかんない事言ってんすか？大袈裟に両手を広げてムダアピールすれば好感度上がればこっちのものとか思ってるなら出直して来て下さい。ごめんなさい」
俺は早口で捲し立て、ペコッと頭を下げる。
「うわ……。ヒッキーそれ、いろはさんの真似だよね？似すぎだし……」
おい。似てるなら引かないで誉めろよ！
何で若干、可哀想なものを見る目になってんだよ？本気で泣いちゃうだろ？
「で？杉並くん。彼に何の用かしら？ろくでもない事に八幡を捲き込もうとしているなら許さないわよ？」
雪姉は腕を組ながら、杉並先輩を睨み付ける。
それを軽く受け流すように、杉並先輩は「ふっ」と浅く笑う。
「雪ノ下雪乃か。前回の文化祭で貴様にしてやられたが、今回は我が非公式新聞部が貴様ら生徒会を完膚なきまで叩き潰してやるから、首を洗って待っていろ」

ニヤリと笑う杉並先輩に、雪姉も不適に笑う。
「ええ。返り討ちにてあげるから、いくらでも相手してあげるわ」
しばらく二人は火花を散らせながら「ふふ……」と笑いながら睨み合ってた。
俺はチャンスと思い、結衣に内緒話しをするように、結衣の耳元に顔を近づける。
「なぁ結衣。もう教室行かね？杉並先輩も特に用もないっぽいしさ」
「え？あぁ、そうだね」
「よし、早くズラからろう。何かここ、凄く目立って嫌だ……」
さっきから登校して来る生徒達がチラチラこっち見てるし。
ぼっちは他人の視線に敏感なんだよ。
結衣とこの場をこっそり離れようと、一歩後ろに下がり登校してきている連中に紛れて去ろうした瞬間、誰かが俺の肩を掴んだ。
一瞬ビクッとした俺は、肩越しに掴んだ相手を見る。
「どこへ行く？比企谷八幡。まだ俺の用は済んでないぞ？」
ニヤリと笑う杉並先輩だった。
「あ、いや……。雪姉と仲良くやってらっしゃたので、俺たちは邪魔かなぁ……なんて。ははは……」
「八幡？いくら私が天使のような優しい存在だからと言っても、その男と仲良く

しているだなんて冗談でも言わないでちょうだい。分かったかしら？」
雪姉はにっこり笑顔のまま、ゆっくり俺に近付いてきた。
てか、誰が天使だぁ？
お前は天使っつーより、鬼とか悪魔って感じだろうが！
などと雪姉に言える筈もなく、俺は「は、はい……」としか返事ができないのである。
「ふむ。ところで比企谷。俺の用だが……」
杉並先輩はそこで言葉を切ると、また大袈裟に両手を広げて言い放つ。
その表情は、いつになく真剣そのものだ。
「俺は、心の底からお前が欲しい!!」
「……は？」
「……え？」
「……へ？」
俺、結衣、そして雪姉も全員ポカーンとアホ面を晒していた。
い、今なんつった？

俺を……欲しい……だと？

「……」

いやいやいやいやいやいや!!

いきなり何言っちゃってんのこの先輩！馬鹿なの？死ぬの？

俺が男と付き合うわけないっつーの！

他の二人の反応も同じだろうとチラッと結衣を見ると、何やら雪姉とブツブツ言い合ってる。

「成る程……それは盲点ね……」

「いやいや！お姉ちゃん、駄目に決まってるし！」

「結衣。よく考えてみてちょうだい？」

「……。あ、いいかも……」

おい、そこの阿保姉妹！聞こえてるぞ！

つか、結衣！お前は頬を染めながら「あ、いいかも」とか言ってんじゃねーよ！

まさか、この二人は既に手遅れなのか!?

腐女子の姉妹と幼馴染みなんて嫌だ！

今後、付き合いを考えようかしら？

「ふふん。さぁ返事はどうした？比企谷八幡!!」

何故か自信たっぷりの表情で俺の返事を待つ杉並先輩。
いや、返事も何も決まってんじゃねぇか。
「丁重にお断りさ……」
「いいわよ」
俺が断りの返事をしていると、雪姉がそれを遮ってきた。
「って、おいいい!!雪姉ぇ!俺にそんな趣味ねぇーよ!分かれよ!なんなら俺の部屋のスピーカーの中とか、ベッドのマットレスの下とか、リビングのソファーの背もたれの裏とか調べてみろよ!ホモな本やビデオなんて一切ないハズだ!」
テンパってしまった俺は、勢いに任せて一気に捲し立てた。
俺はノンケだから!
他人にどう思われても構わないが、これに関しては断固否定させてもらう!
「……ふ~ん。ヒッキーそんな所にエッチな本とか隠してたんだ?」
「……え?」
結衣がジト目で俺を睨みながら、繋いでる手をギューッと力を込められている。
ちょっとガハマさん?地味に痛いんですけど……。
「どうりで男子高校生の部屋のわりにエロ本がないわけね。定番のベッドの下とか本棚の裏とかいくら探しても無いわけね。さすが小賢しい事に関してはプロ並みね

？」

「……へ？」

雪姉は雪姉で、ハイライトを消した瞳でにっこりしながら近寄ってくる。

あ、あれ？

俺、勢いに任せてとんでもないこと言っちゃった？

てか、雪乃お姉さま。人の部屋を勝手に入って家探ししてたの？

「ふふん。同士比企谷よ。焦っていたとは言え、冷静に対処しなければな。しかし、リビングのソファーの背もたれの裏……か。なかなか大胆な発想をするじゃないか！ふあーはっはっはっ!!俺でも思い付かんぞ！益々ほしくなった！」

「うるさい！」

「むぐっ……」

高笑いした杉並先輩に、雪姉と結衣はシロクマもビビって海にダイブしちゃうくらい冷たい視線を喰らい、口を紡いでしまった。

さすがに杉並先輩といえど、美少女二人には勝てなかったらし。

そして二人の美少女は俺に向き直る。

冷たい視線のまま……。

やばい……。

そう感じた瞬間。
神は俺を見捨てていなかった！
キーンコーンカーンコーン
ナイスタイミングで学校のチャイムが鳴ったのだ。
「ほ、ほら！結衣も雪姉も遅刻しちまってもいいのか？早く行くぞ！」
思いのほか強く握られていた結衣の手が、少し弱くなったのを見計らってスルッと手を離す。
それから俺は一目散に自分の教室へ向かった。
「あっ、コラ！ヒッキー！」
「八幡！待ちなさい！」
「同士比企谷！お前の気持ち、しかと受け取ったぞ！」
走り出した俺の後ろが何やら騒いでいたが、俺は無視して冬晴れの青空の下、全力で昇降口へ向かうのであった。

３へ続く。

Vol. 3

俺は脱兎の如く我が1年F組の教室へ入ると、すぐに自分の席に座り突っ伏してしまった。

お、俺は何を言ったんだ!?

いくら俺がノンケアピールしたかったからって、エロい本やDVDの隠し場所をゲロっちまうなんて……。

しかも結衣と雪姉に……。

ホント馬鹿！ばーかばーか！アホ！マヌケ！ホントマジで死んじゃえよ俺！

ぐぬぁああぁぁぁああっ！

心の中で絶叫していると、ポケットの中に仕舞ってあるスマホがブルブル震えだした。

どうせ密林さんからのメールだろうと放っておく、2、3回震えた後止まった。

と思ったら、また震え出した。

なんだよ……。と思いつつスマホを取り出すと、雪姉と結衣から各々メールが届いて

いた。
雪姉のメールを開く。
『昼休みに生徒会室へ来なさい。来ないときは、年内いっぱい結衣の手作りごはんを毎日食べさせてあげるわ』
……マジですか？
やっぱ、あんた天使じゃなくて悪魔ですよね……。
続けて結衣からのメールも開いてみる。
『ヒッキーなんで先にいっちゃうし！（〉д〈）／
教室まで一緒に行こうと思ってたのに‼ばかっ！（＞＿＜）
放課後は絶対に一緒に帰るからね！（？^？）』
相変わらず顔文字が多いな。
アホみたいだから止めれば良いのに。
あ、アホだったか……。
結衣の席をチラッと見てみると、奴はニコニコしながら俺を見ていた。
俺の席は一番校庭側の窓際、後ろから二番目の席で、結衣は一番廊下側の前から二番目の席のため、俺の方からだと結衣の席はわりと見易い位置だ。
どうやら結衣は、俺が脳内で悶絶しているうちに教室に入ってきたらしい。

俺は、二人に返信する。

『了解。死にたくないから生徒会室行くわ』

雪姉には、こんな感じか？

結衣には簡潔に……。

『いやだ。めんどくさい』

よし、上出来だ。

俺が二人にメールを送り結衣を見ると丁度俺のメールが届いたらしく、いそいそとスマホを弄りだした。

メールを確認すると、結衣は頬を膨らませながら俺を睨んでいたが、俺は気にせず机に突っ伏してしまう。

一緒に帰れるわけないだろ……。

「くぁ～……」

口を大きく開け、欠伸が出てきた。

……なんだろう？

やけに眠い……。

いや、理由は分かってるんだ。

今朝見た夢みたいな、自分の意識がハッキリあるリアルな夢を見ると、翌日は決まっ

て睡魔に襲われる……。
今日は朝から、いろはさんやら結衣やら雪姉やら杉並先輩やらで、眠気を感じなかったが、落ち着くとヤバイ……。
あ……。この席、陽当たりが良いんだった。
気持ちいい……。先生が来るまで少し寝よ……。
俺はそのまま眠りに入ってしまった。

「……ツキー……てばっ！」
あ？誰だよ……。
今、すっげー眠いんだから起こすなよ……。
「……きなさい。……幡」
ったく、うるせーな……。
無視だ無視。
誰かが俺の眠りを妨げようとしているが、俺はそんなに甘くないんだよ。
むにゅっと、軽く頬をつねられる。
「むにゅ～……。やめりょよ……結衣……」

どうせ、こんな悪戯紛いな起こし方するのは結衣だろうと思い抗議するが、眠すぎて口が上手く回らない。

抗議したのが項を成したのか、周りが静かになる。

よし。これで安眠でき……。

「痛っ！ぐぁあああっ!!」

ゆっくり寝られると思った時だった。

俺のアホ毛を、思いっきり誰かが引っ張り上げたのだ。

「あら、おはよう。八幡」

「ゆ、雪姉?!なんで……」

俺のアホ毛を慈悲もなく引っ張り上げていたのは、我らが生徒会長で俺の姉的存在の雪ノ下雪乃が微笑んでいた。

雪姉の目は、南極のペンギンも驚いて心臓麻痺を起こしそうな、冷たい瞳だったが……。

口元だけ笑顔って怖すぎでしょ……。

雪姉が怖すぎて目線を反らす。

雪姉の隣には、何だか顔を赤くしている結衣が恥ずかしそうにモジモジしていた。

周りのクラスメイト……と言うか、男子は俺を睨んでいた。

え？なんで俺睨まれてんの？
目を反らされてイラッときたのか、雪姉はさらに強くアホ毛を引っ張ってきた。
「痛って！いいから手を離せ！痛い！痛い！マジで痛いから！禿げる！禿げちゃう!!」
「あらそう？じゃあ、禿げてしまいなさい。約束を守らない八幡が悪いのよ？」
「……は？や、約束？」
「ホームルームの前に、メールしたわよね？」
「お、おう……。ついさっきだろ？」
「はぁ……。あなた、いつから寝ていたのかしら？」
雪姉は溜め息を吐くと、やっと手を離してくれた。
ヒリヒリする頭皮を撫でながら、若干涙目で答えた。
「2、3分前から……って、雪姉授業はいいのかよ？」
「はぁ～～～……」
今度は、さっきよりも長くて重い溜め息を吐く雪姉。
おい、何だ？
その憐れんだ顔は……。
そして雪姉は、そのまま右手をこめかみに持っていく。
「あ、あはは……」

結衣は何故か乾いた笑いを洩らす。
あ？俺、変なこと言ったか？
「八幡。その腐りきった目で、よぉ～くそこの時計を見なさい」
雪姉は黒板の上にある壁時計を指す。
その指を追って時計を見れば、
１２：３３。
「……あれ？」
２、３分前に寝たばかりだと思ってたのに、いつの間にか昼休みになっていた。
「あれ？じゃないでしょう……。あなた、午前中いっぱい寝ていたって事じゃない」
「ヒッキー、先生に注意されても全然起きなかったんだよ？」
「マジか……」
二人の顔を見ながら茫然としてしまう。
「まぁいいわ。どうせ徹夜でゲームでもしていたのでしょ？とにかく生徒会室へ行くわよ。お昼ご飯が食べられなくなるわ。お説教は学校が終わってからよ」
「……は、はい」
「え？お、お姉ちゃん、ヒッキーと食べるの？」
雪姉が俺達から離れて教室を出ようとすると、結衣が少し驚いた様子で雪姉に聞いて

きた。
「ええ。あ、丁度いいわ。結衣も一緒に来て欲しいの」
「え？あたしも？」
「ええ。結衣にも関係あることだしね」
「あたしも？って、ああ～、今朝のこと？」
「そうよ。時間があまり無いの。二人とも、お弁当持って早く来てちょうだい」
俺と結衣は、弁当を持って雪姉の後ろを着いていく。
人が殆んどいない生徒会室近くまで来たが、三人とも特に会話もなくテクテクと生徒会室まで歩いていると、結衣が俺の方にスス～っと寄ってきた。
なんぞ？と思って結衣を見ると、顔を膨らませながら顔を赤くして俺を睨んでいた。
「……何だよ？」
「ヒッキーのせで、あたし恥ずかしかったんだからね？」
「は？」
いや、今日の俺はずっと寝ていたのだから、俺のせいで結衣が何かされたとか、あり得ないと思うんだが……。
「ヒッキーが先生に注意……てか、体罰？的な起こされ方する度に変な事言うからだし……」

結衣はそう言うと、顔を赤くしたまま俯いてしまったが、まったく身に覚えが無かった。

つーか、体罰的な起こされ方ってなんだよ？

そっちの方が気になるんだが？

俺が寝ている間に鞭でひっぱたかれたりしたの？

それをやられた俺は「あん。もっとぉ～」とか言っちゃったりしたの？

って、いくらなんでも鞭なんかでひっぱたかれたら飛び起きるわな……。

「変な事ってなんだよ？」

「さっきみたいに『やめりょよ……結衣い～…』とか言ってたんじゃないかしら？」

俺と結衣の前を歩く雪姉が話しに入ってくる。

「は？んな恥ずかしすぎる事、寝惚けていても俺が言うわけ無いだろ」

「……言ってたし」

「あ？」

「だから！授業中、先生がヒッキー起こす度に『止めろよ結衣い～……』とか『結衣もう少し寝かせろ……』とか『雪姉ホント怖いわー……』とか『いろはさんマジあざとい……』とか言ってて、超恥ずかしかったんだからね！おかげでクラスの皆から、どんな関係なの？とか色々聞かれて大変だったんだから！」

「お、おう……。悪かったよ。とりあえず落ち着け。な？」
一気に捲し立て「はぁはぁ」言っちゃってる幼馴染みを両手で肩を掴み、落ち着かせる。
すると、いつの間にか俺の側まで来ていた雪姉が笑顔で聞いてくる。
「へぇ……。八幡は私を怖がっていたのね？私の何が怖いのかしら？」
いや、それだよ、それ。
その笑顔の裏にダークなオーラを感じさせるトコだよ。
などと俺は言えいので、しどろもどろになりながらも何とか応える。
「い、いや……。こ、コワクアリマセンコトヨ……」
バッチリ雪姉から顔を反らしながらも、片言で返事をした。
若干、変な日本語になってしまったが、それは雪姉が怖いから仕方ないよね？
うん、俺は悪くない。
「そう……。あ、結衣」
雪姉は俺の変事を聞くと、これまた凄く良い笑顔で結衣の方に顔を向ける。
「なに？」
「八幡が今夜から毎日、結衣の手作り料理を食べたいとさっき聞いたの。どう？作りたいかしら？」

は？え、いや、ちょっ……。
何言っちゃってんの？この馬鹿姉貴。
「え？ほ、ほんと!?」
結衣は、いきなりパァーっと明るくなり満面の笑顔を振り撒き出した。
「ええ、本当よ。私が結衣に嘘を言う筈ないじゃない」
いえ、大嘘ですから……。
それこそ寝言でも絶対に言わないから！
「おい雪姉！俺はそんなこと一言も……」
「あら、今朝の約束を守らなかったの誰かしら？守らなかった場合の約束もちゃんとしたわよ」
当然の罰でしょ？とでも言いたげなドヤ顔をする雪姉。
うぜぇ……。
「ヒッキー、食べてくれないの？」
本気で不安そうに、上目遣いで言ってくる結衣。
これが、いろはさんだったら「あざとい」の一言でおわるんだが、こいつの場合は『可愛いアピール』なんて考えてない。
大体こんな時は本気も本気。超大マジで不安がっていたりする。

するんだが……。
食いたくねぇーーー!!
「まさか、食べたくない……なんて思ってないわよね？誕生日が数ヵ月しか違わなくても、10年以上一緒に暮らしていた結衣お姉ちゃんの手料理よ？」
「あたし、ヒッキーに美味しい！って言ってもらえるように頑張るから！」
雪姉と結衣は、グイグイ俺に言い寄ってくる。
それに合わせて俺も後ろに下がると、廊下の壁際まで二人の圧力で押されてしまう。
「ちょっ、ちょっと待て！結衣だって毎日作るの大変だろ？だから……」
「大丈夫！あたし、ヒッキーが好きな食べ物知ってるから！ちゃんと凄く甘くて美味しいの作るから！」
ご飯だよね!?スイーツと一緒に米食うのかよ！まったく大丈夫じゃねぇ!!
壁を背に冷や汗ダラダラな俺は、震える足のせいで軽く腰を落としてしまう。
ヤバイヤバイヤバイヤバイ！何とか回避しないと！回避回避回避回避！
俺が脳内でテンパっていると、突然俺の左耳を結衣の右手が掠める。
ドン！と結衣の右手が壁に当たる音がした。
至近距離に結衣の顔が見える。
ドン！と、今度は俺の右耳を雪姉の左手が掠める。

こちらも至近距離で雪姉の顔が見えた。
だ、ダブル壁ドン……だと？
「ヒッキー……いいよね？」
「八幡……覚悟なさい？」
他人が聞いたら、間違いなく誤解されそうなセリフを言わないで！
ここ、ホント人通りが無くて助かった……。
「八幡。返事は？」
「ヒッキー……」
雪姉はニヤニヤしながら、結衣は目尻に涙を溜めながら顔を近付けてくる。
近い近い近い良い香り可愛いやっぱ近すぎっ！
こ、これは食わないといけない空気だよな……。
いや、目の前の美少女たちじゃないよ？結衣の手料理な？
「はぁ～……。わかったよ。付き合う」
溜め息と共に覚悟を決め、ガクッと肩を下ろしてしまう。
「やったーーー！あたし頑張るね！」
「ええ、私も出来るだけ手伝うわ。」
結衣は両手を上げ、はしゃいでいる。

雪姉は、それを見て優しく微笑んでいた。
俺はそんな二人を見て、帰りに胃薬を大量購入することを固く誓ったのだった。

なんやかんやあって、ようやく生徒会室にたどり着いた。

生徒会室の中は、俺達が普段使っている教室の半分ぐらいの広さで、クリスマスパーティー用のポスターだったり、何かのスケジュール表だったり、ペタペタ色々な物が貼ってある。
部屋の真ん中には、長机を二つくっ付けて並べられていて、椅子が三つずつ両サイドに並べられている。
奥にはホワイトボードがあり、窓際には教室でも使っている勉強机がぽつんと置かれていて、その上には３０ｃｍぐらいの大きさのパンダのパンさんが「ここは俺の場所だ」と言わんばかりにデンと鎮座していた。
相変わらず、あの凶悪な目付きのキャラクター大好きなんだな……。
「適当に座って頂戴」
雪姉がそう言うと、いつもの定位置なのか、入口のドアから見て右奥の席に座る。
俺と結衣は、対面の席に並んで腰を下ろした。

雪姉の正面が結衣で、隣に俺が座った。
「お昼を食べながらでいいから聞いて頂戴」
雪姉は持ってきた弁当を広げながら言う。
俺と結衣も持ってきた弁当を広げ、蓋をパカッと開けて「いただきます」と手を合わせて箸を持った。
「あら？結衣また八幡に作ってもらったのかしら？」
俺達の弁当の中身が同じだったのを見て、雪姉は言ったのだろう。
「えへへ。ヒッキーのお弁当美味しいから好きなんだぁ♪」
あの、そんな嬉しそうに言わないでくれません？
恥ずかしいっつーの！
「ま、まぁ、夕べの残り物とか冷食ばっかだけどな……」
「うん。でも、この唐揚げとか食べやすいサイズにカットしてくれてたり、あたしの好きな物がさりげなく入ってたり、いつもお昼が楽しみなんだぁ♪」
「へぇ、良かったわね。結衣」
「うん！」
どこか嬉しそうに微笑みかける雪姉と、幸せそうに唐揚げを頬張る結衣を見て、素直に嬉しくもあるのだが、妙に胸の辺りがむず痒くて仕方がないので、強引に話題を変え

る事にした。
「と、ところで話しって何だよ?やっぱ杉並先輩と板橋先輩の事か?」
「そうよ。……八幡、あなた杉並くんと付き合ってあげなさい」
キッと鋭い目で、平然と雪姉は言ってのけた。
「絶対に嫌だ。俺にそんな趣味は無い!」
腕を組み、ふんぞり返って宣言してやると、結衣もそれに続いた。
「そ、そうだよ!男の子同士で……つ、付き合うとか無いよ!」
よしよし。よく言ったぞ結衣。後で好物の桃缶をやろう。
今朝の「ありかも……」発言は取り消してやろう。
「……あなた達は何を想像しているのかしら?付き合えと言ったのは、杉並くん達の仲間に入って情報を生徒会にリークしてほしいと頼んでいるのよ?」
呆れた顔で俺と結衣の顔を見る雪姉。
「今朝の杉並くんだって、そんな意味で八幡を欲しいなんて言ってない筈だわ」
「え、じゃあ『盲点だったわ』って、あたしに言ってたのは……」
「そうよ。スパイを送り込んで情報を手に入れること。それで何で八幡と杉並くんが恋人になるって発想になるのかが不思議だわ」
お前の言い方に問題があるって分からんのか?この会長さんは……。

あと、杉並先輩もな。
「いや。それ以前に俺スパイなんか出来ないぞ？」
ぼっちのコミュニケーション能力は、かなり低いんだぜ？
「あっ！そうだよ！ヒッキー、あの変態さんのスパイやってる場合じゃないよ！ヒッキー主人公じゃん！」
結衣が立ち上がって何かよく分からん事を言ってきた。
「おい結衣。主人公って、なんの事だよ？」
てか、変態さんって杉並先輩の事か？
「ああ。ヒッキー寝てたから知らないのか。ヒッキーが寝ている間にロングホームルームがあって、平塚先生がいくらヒッキーを起こしても起きないから、なかなか決まらなかったクリスマスパーティーの催し物の人形劇の主人公を先生が強引に決めちゃってたんだ」
「……」
一瞬、思考が停止してしまった……。
は？クラスで仲間外れに　される事に定評のある、この比企谷八幡に人形劇の主役を張れと？
「いやいや！それ絶対に無理だから！俺に演技なんて無理だから！大体、劇って何やる

かも知らされてないんだぞ?!」
「え、えっと……。クリスマスっぽくしたいからって……。ら、ラブロマンス?」
何故そこでお前が赤くなる?
「ぼっちの俺が、ラブロマンスの主役……だと?」
「う、うん」
しん。と静まり返る生徒会室。
恋人どころか、友達すらいない俺にラブロマンスの主役?
「ち、因みにヒロインは……あたし……になりました……へへへ」
結衣は照れ臭そうに頬を染めながら、自分のお団子頭を撫でている。
「いや、なんでお前喜んでんの?普通は嫌がるだろう……。相手は俺だぞ?」
「ヒッキーのせいだし……」
「は?」
「だから!ヒッキーが寝言で、あたしの名前出すから、その流れで平塚先生に強引に決められたの!『幼馴染みだし、丁度いいだろう』って!」
箸を俺の顔の前に突き出し、真っ赤な顔で結衣は抗議してきた。
「わ、悪かったよ。つか、箸をどかせ。怖ぇよ……」
「成る程そういう理由があるのね……」

今まで黙って聞いてた雪姉が、ボソッと呟いた。
何か考えている時には、必ずに指を顎に持っていく雪姉の癖だ。
う～ん。普段から雪姉には世話になってるからな。
夕飯作ってもらったり、洗濯してもらったりしてるし……。
手伝えるなら手伝いたいが、主役ということは台詞も大いに決まっているし、何よりパーティーまで後１０日もない。
その上で、杉並先輩たちのスパイって、かなりハードだよな……。
あ、人形劇の方を断れば行けんじゃね？
平塚先生に理由を話せば、分かってくれそうだよな。
何より、人形劇とはいえ主役なんてやりたくない！
杉並先輩を相手してる方が気は楽だ。
結衣も相手が俺じゃない方がいいだろう。
「よし、先生に理由を話して、主役を断ってくる。杉並先輩の名前出せば、たぶん行けるだろうしな」
「え……」
言った瞬間、結衣の表情が曇ったが雪姉が遮るように言う。
「八幡、やっぱり貴方は人形劇の方に出なさい。少しはクラスメイトとのコミュニケー

ションを取った方がいいわ」
「は?!何でそうなるんだよ?杉並先輩たちは良いのかよ?」
「そっちは何とかするわ。代案も有ることだし」
「代案?」
「副会長を使って杉並くんたちに接触させるのよ。彼だとどうかと思ったのだけど、仕方ないわね」
副会長って、葉山先輩か……。
葉山隼人。
雪姉と同じ二年生で生徒会副会長の先輩だ。
イケメンで、勉強が出来て、スポーツが得意で、皆からの信頼も厚い。
そんなリア充のリア充、リア王葉山隼人が俺は嫌いだった。
あの爽やかヤクザ、絶体に雪姉を狙ってるに決まっている。
雪姉は何でか知らないが、葉山先輩には嫌悪感を抱いてるようだしな。
「大丈夫よ結衣。本当は貴女にも八幡と一緒に杉並くんたちのスパイをして欲しかったのだけど、そんな事になってたなら話しは別ね。応援するわ」
「お姉ちゃん……へへへ」
「お前、そんなにヒロインやりたかったの?」

「う、うん……。だって、今まで小学校からずっとヒッキーと同じクラスだったのに、学校でこういうの一緒にやったことなかったから……。いいかなって……」

俺は小学校でも中学校でも、嫌われ者だったからな……。

結衣とは学校では距離を置いていたのは事実だ。

雪姉の事も気になるが、結衣にこう言われたら頷くしかない。

結衣にも恩が山ほどあるし……。

「まぁ、雪姉と結衣がそれでいいなら、劇の方に出てもいいけどさ……」

結衣と雪姉は、お互いに顔をみあわせるとクスッと笑っていた。

それを見た俺は、なんだか納得いかない気分になり、残りの弁当と一緒に飲み込んだ。

Ｖｏｌ．４へ続く。

Ｖｏｌ．４

生徒会室で俺と結衣、雪姉の３人で昼飯を食べていると、ノックもなしに突然、生徒会室のドアがスパーンと勢いよく開かれる。

それと同時に「会長！」と慌てた声が聞こえた。

俺達３人はドアの方に顔を向けると、２年生の女子２人組が息を切らせていた。

「落ち着きなさい。どうしたのかしら？」

相手に冷静になるよう雪姉が促し、用件を聞いていた。

「あ、ごめんなさい。あの、パーティーの催し物に使う大型のセットが、誰かに盗まれたっぽくて……」

「でも、あんなの男子が２、３人で運んでも無理な重さだよ？」

「いつ盗まれたのかしら？」

雪姉は例の考えるポーズをとり思案顔だ。

「つい１０分ぐらい前です。２、３分ほど目を離した隙に……」

「そう……分かったわ。貴女たちは教室へ戻っていてくれるかしら？私も直ぐに

行くから」

「お願いします！」

２人組がドアを閉めて、バタバタと戻って行った。

雪姉は「ふぅ……」と、軽く息を吐き出し立ち上がる。

「ごめんなさい。私のお弁当は2人で分けて食べて頂戴」

雪姉の弁当箱を見ると、半分も減っていなかった。

雪姉がドアに手を掛けると同時に俺は呼び止める。

「雪姉。ちょっと待っててくれ」

俺は右手を出し軽く念じると……あら不思議。

お饅頭が俺の掌に乗っかっていた。

「あ……。出してくれたのね？」

「只でさえ小さい弁当箱なのに、その半分も食ってないんじゃ持たないぞ？」

雪姉は饅頭を俺から受け取ると、嬉しそうに微笑んだ。

「ふふ。ありがとう八幡」

そう言うと雪姉は踵を返して行ってしまった。

ま、少しは腹の足しになるだろう。

「いいなぁ、あたしもお饅頭たべたいなぁ～」

振り返ると、結衣が物欲しそうに見ていた。
「お前はしっかり弁当食ってるだろ？」
「ひーきだ！お姉ちゃんばっかズルい！甘い物は別腹だもん！」
「わかったわかった、騒ぐな！メシ食ってからな」
「うん！あ、栗の入ったどら焼きがいいかも！」
「饅頭じゃないのかよ……」
席に着いて残りの弁当を食い始めると、結衣が「じー」っと俺の右手を見ていた。
「和菓子を出す魔法か……。へへ、何かヒッキーらしくない可愛い魔法だよね？」
「悪かったな。可愛くなくて……。ま、そこは俺も認めてるがな」
「認めてるんだ……」
そう。
実は俺、魔法が使えちゃたりする。
と言っても使える魔法は、和菓子を出すというメルヘンチックな事だけ。
使うエネルギー源は自分のカロリーから消費されるので、自分で自分の使った魔法で和菓子を出して食べても、何の足しにもならない。
他人を喜ばせる為だけにある魔法だ。
どうして、この魔法を覚えたのかは記憶にないんだよなぁ……。

ま、妙な白い生き物に「僕と契約してよ」とか言われてないから大丈夫だろう。
「お姉ちゃん喜んでたよね？嬉しそうにしたし」
そういえば雪姉に和菓子をあげたのって、いつ以来だったけ？
「そうだな。お前みたいに、しょっちゅう出せとか言わないしな」
「むっ。それじゃあたしが食いしん坊みたいじゃん！」
『みたい』じゃなくて、実際に食いしん坊だろ。
それからは結衣と2人で、どうでもいい会話をして昼休みは終わった。

午後の授業もあっという間に終わり、さっさと帰ろうとバッグに教科書やノートを突っ込み教室を出た時だった。
「くくく。まさかこんな所で会うとはな驚いたぞ。ーーー待ちわびたぞ！比企谷八幡!!」
そいつは何故か俺に背を見せ、肩越しに俺を見ている。
真夏でも格好いいからと着込んでいるコート。
小太りな体形に、黒縁メガネと指ぬきグローブの男がそこにいた。
「おい材木座。日本語が変だぞ？こんな所て会って驚いたのに、待ちわびたってどういう事だよ？こっちが驚いちまったじゃねーか……」

材木座義輝。
隣の１年Ｇ組の奴で、体育の時間にぼっち同士よく組んでいるだけの奴である。
杉並先輩と同じ中二病を患っていて、とても面倒臭く暑苦しい奴である。
「けぷこんけぷこん、おこぽーん！そんな些末な事どうでもいいわ！」
何だよ今の？
咳払いか？おこぽーん！って何だよ？
「八幡……。我らが非公式新聞部に入るとは本当か？」
材木座は掛けているメガネをクイッと押し上げ聞いてくる。
「ああ～。そんな誘いあったなぁ。あれ断るわ」
「ぬぁにぃー?!我が主君たる杉並先輩の誘いを直に受けながら断るとは何事だ！八幡！」
こいつは何故か杉並先輩を崇拝している。
それはもう神のように。
「いや俺は別に興味ねぇし……」
「くくく。嘘は良くないぞ八幡。我にはとっくにお見通しだ！何の刺激もない学校生活を送り、無駄な時間を送る日々に嫌気が差しているのであろう？」
「いや別に？刺激の無い生活大いに歓迎なんだが？むしろ、こっちから行きたい

まである。じゃあ、そうゆうことで」

そのまま材木座の脇を通り、昇降口へ向かおうとすると、材木座が俺の肩を掴んだ。

「くくく。またそのような虚勢を張りおって。無理は良くないぞ？八幡よ」

うっぜぇ～……。

早く帰りてぇのに、何でコイツこんなにしつこいんだよ！

「はーっははははは!!よくぞ引き止めておいたな。材木座義輝よ！」

高笑いと共に2人組の男子生徒が現れる。

1人は、もちろん杉並先輩。

もう1人は、チャラそうな風貌の板橋先輩だ。

成る程、材木座がウザったく絡んできたのはこの為か……。

まぁ、材木座はいつもウザったいんだけど……。

「おお。お前が杉並の言っていた比企谷か！確かに目が腐っているなぁ。一目でわかったぞ」

板橋先輩は馴れ馴れしく、俺の首に手を回し話し掛けてきた。

この人も結構ウザったいかもしれん。

「はあ……。それはどうも……」

うわ～…。なんか、校内でも悪い方に目立つ３人に囲まれて、周りの目が痛いんですが……。

「ふん。で？同士比企谷、今朝の返事をお前の口から直接聞きたいのだが？」

杉並先輩は腕を組んで、口の端を厭らしく吊り上げている。

「ああ。その話なら丁重にお断りします」

「ふふふ。雪ノ下雪乃の指示か？残念だったな。あいつの策は俺には効かなかったぞ？」

「え？」

「なにを思ってかは知らんが、この俺の前に学校のアイドル葉山隼人を送って来ようなど片腹痛いわ！」

ああ……。やっぱ葉山先輩じゃ無理だったか……。

ま、全然期待なんかしてなかったけどな。

つか、どうするんだ？

このままだと、クリスマスパーティーは杉並先輩によって、ぶち壊されるんじゃ……。

「同士比企谷よ。お前の考えている事は分かっているぞ？クリスマスなんぞに、うつつを抜かすリア充どもに正義の鉄槌を下してみたいんだろう？んん～？」

「っ……！」

や、ヤバイ……。わりと本気でヤバイ。

リア充どもに正義の鉄槌……めっちゃ喰らわせてみたい！

幸せそうなリア充どもが、俺の正義の鉄槌で絶望する姿を是非とも見てみたい！

はっ！いかんいかん！杉並先輩達の仲間に入れば、必然的に雪姉の敵になってしまう！

そうなれば、どうなるかは火を見るより明らかだ！

いや、でもリア充どもにも……。

「ヒッキー！」

心の中で葛藤していると、結衣の大きな声が聞こえた。

と思ったら急に右腕を掴まれ、そのままスタスタとその場を離れようとする。

「まぁ待て、由比ヶ浜結衣」

杉並先輩は行ってしまおうとする俺達を止めるために、俺の左腕を掴んだ。

「なんですか？あたし、先輩に用なんて無いんですけど」

珍しく結衣が敵意を隠しもせずに杉並先輩と対峙していた。

「なぁに、貴様とて見ていたのであろう？比企谷が迷っている姿を。だから慌てて比企谷を連れ去ろうとした。違うか？」

え？俺、そんなに分かりやすく迷っていたの？
クールにポーカーフェイス決めてると思ってたのに！
「し、知りません！そんな事。行こうヒッキー」
そう言うと結衣はグイッと強めに俺の右腕を引っ張ると、左腕を掴んでいる杉並先輩の力も強くなった。
いや、あんたら地味に痛いんですが……。
「ふふ。そうはさせんぞ？由比ヶ浜結衣」
「先輩こそ何を考えてるんですか？ヒッキーを捲き込まないで下さい！」
俺の両腕に更に引っ張る力が増してきた。
「ちょっ！お前ら、痛い痛い！マジで痛いから離せ！」
「そこまでよ！杉並くん」
冷たく澄んだ声が廊下に響いた。
杉並先輩の背後に現れたのは雪姉だった。
雪姉の両隣には、葉山先輩と風紀委員長の高坂まゆき先輩が立っていて、その後ろには生徒会の面々が揃っている。
「ふん。生徒会役員勢揃いとは、そんなに俺が怖いのか？雪ノ下雪乃」
杉並先輩は俺の左腕を掴んだまま、雪姉に挑発的な事を言う。

杉並先輩の表情は俺の角度からは分からないが、おそらく余裕の笑みを見せているのだろう。

「怖い？何を言っているのかしら？貴方が私の可愛い弟分と妹分の八幡と結衣にちょっかいかけているから止めにきただけよ？怖いなんて感情は皆無よ」

可愛いとか思ってるなら、もう少し俺に対して優しくしてくれてもいいんじゃないんですかね？

「ふふ。そんな私的な事で生徒会を動かすとは言語道断だな」

「あら？私的も確かに入っているけど、八幡と結衣は立派な風見学園の生徒よ？その学園の生徒達が悪の根源である貴方達に絡まれているのを見たら、普通は止めないかしら？」

「ふん。モノは言いようだな」

杉並先輩は１０人近くいる生徒会役員や風紀委員を見る。

「しかし流石の俺でも、この人数相手に事を構えても敵わん。今回はこれで退散してやるが、俺はまだ諦めんぞ？」

「ええ、それでこそ張り合いがあるって物よ。どこからでもかかってきなさい？返り討ちにしてあげるわ」

「……」

「……」

数秒間２人は今朝と同じように睨みあった後、杉並先輩は俺の腕を離した。

一瞬、杉並先輩は俺の方をチラッと一瞥すると、そのまま俺と結衣のわきを通り過ぎて行ってしまった。

「なぁ～んだ。比企谷は俺達と組まねぇのかよ？」

板橋先輩が膨れっ面で俺を見ていた。

「え、ええ。まぁ、そんな感じっす……」

「そっか……。材木座ぁ、話が違うんですけど？確か『我に任せて頂けるなら八幡なんぞ赤子も同然』とか何とか言ってなかったけ？」

雪姉が来てからずっと地蔵タイムだった材木座は、板橋先輩の声にビクッと反応する。

冷や汗が凄い事になっていて、その風貌といい、ガマの油状態である。

「あ、いや、その……。すみませんでした……」

悪の根源である一人の板橋先輩の前では、材木座もひれ伏すしか無いらしい。

「板橋くん。あなたも、あんな男からは手を切ってはどうかしら？」

雪姉は板橋先輩に近付き、杉並先輩と手を切ることを促した。

「う～ん。今回はスポンサーも付いてるし、大規模な計画を立ててるからパスで」

「スポンサー……ですって？」
怪訝な表情をみせる雪姉に、板橋先輩は何でもないように言う。
「そ。雪ノ下さんも知ってる、雪ノ下グループ次期当主様がスポンサー♪」
板橋先輩に言われた瞬間、雪姉はもちろん俺と結衣も固まってしまった。
い、今なんて言った？
雪ノ下グループの次期当主？
まさか……。
まさか、あの魔王が降臨するってのか?!
「うそ……。は、陽乃さんが？」
結衣は震えていた。
無理もない……。俺達3人は雪ノ下陽乃から子供の頃、大きなトラウマを植え付けられているのだ。
雪ノ下陽乃。
この風見学園ＯＢで、某有名国立大学の理工学部に進学し、現在は大学2年生だ。
陽乃さんは雪姉の実の姉で、陽乃さんが中3になる春まで由比ヶ浜の家によく遊びに来ていたが、それっきり会っていない。

たまに雪姉の電話に連絡が来て近況を報告してくるぐらいだ。
雪ノ下グループとは、元々は雪姉の親父さんが建設会社の社長やら県議会議員など勤めていたらしく議員を辞職した後、経営危機の真っ只中にいた大手の工務店や家電メーカーなどを買収し、日本でも五本の指に入る程の大会社になった。
陽乃さんは大学生でありながら、実はグループ傘下の会社の社長もやっているらしい。
なんの会社かまでは知らんが……。
「ね、姉さんが……杉並くん達のスポンサー……ですって？」
雪姉は顔を真っ青にしている。
気持ちは分かる。
ガキの頃、只でさえ厄介な存在だったのに、今度は頭脳＋カネを手にしている。
間違いなくパワーアップしているに違いない。
最早、魔王なんて生易しいものじゃない。
大魔王はるのん！
……なんか、全然怖そうに思えない上に締まらんな……。
「ま、そんなにビビること無いと思うぞ？大掛かりな悪戯ってだけで、死人や怪我人が出ないように配慮するらしいからさ」

板橋先輩はあっけらかんとそう言うが、相手はあの陽乃さんだ。
「あ、あはは。そ、そうだよね。いくら陽乃さんでも……」
結衣は空気が重くなったのを感じてか、無理に明るく振る舞おうとしていたが、段々声が萎んでいってしまう。
「確かに死人や怪我人が出ないように配慮はするかもしれないけど、あの姉さんよ？器物破損ぐらいは有り得るわ……」
「キブ……ハソン？外国の人？」
……。
唐突な結衣のアホ発言に、ここにいる全員がポカーンとしてしまう。
「……ぷっ。クスクス」
ホケーとしていると、雪姉が口を押さえ肩を揺らして吹き出していた。
「え？あ、あたし何か変なこと言った?!」
こういう天然でボケる結衣に、俺と雪姉は何度も救われていた。
「ああ……。ホント結衣はアホの子だなぁ」
「むがーっ!!ヒッキーどういう意味だ！」
つい俺が口に出してしまった本音を聞いた結衣は、俺の耳元で騒ぎ出した。
「うるせぇな……。本当の事だろ？大体、キブ・ハソンって誰だよ？器物破損な、

他人の物や公共の物を無断で壊す事だぞ？外国人じゃないからな？」
「し、知ってたし！なんか空気が重くなっちゃってたから、わざと言ってみただけだしっ！」
「そっかぁ。結衣はいい子だもんなぁ。言ったあとテンパってたのも、わざとだもんなぁ」
「なんか言い方が優しくてムカつく！」
俺と結衣が、ギャーギャー喚いていると板橋先輩と材木座も騒ぎ出す。
「八幡！貴様、我を裏切ったな！この中途半端イケメン！」
何だよ？その、中途半端イケメンて……。
「そうだー！俺は、お前がぼっちで童貞だと聞いたから仲間に入れようとしたのに！彼女がいるなんて、俺は聞いてねーぞ!!」
材木座は悔し涙を滲ませ、板橋先輩は両手を頭にして膝を床につけ叫んでいる。
「ちょっ！ち、中二も板橋先輩も、あたしとヒッキーが……その……っ、っっっっつ付き合ってるとかじゃないから！」
結衣は顔を真っ赤にして反論しているが、材木座や板橋先輩は構わず騒ぎ出す。
「そんな真っ赤な顔で、反論されても説得力皆無！我の目は誤魔化されんぞ！」
「そうだー！付き合ってなくてもヒッキーラブなんだろぉ!!ちくしょおー！」

板橋先輩は頭を掻きむしり始めてしまった。

「な、なななななな……！ち、違うし！そんなんじゃないんだから！二人ともキモイ！」

あー……。

これ、そろそろ結衣に助け船出した方がいいな。

俺が口を開けて声を出そうとした瞬間、雪姉が俺の前に出てピシャリといい放つ。

「貴方達、黙りなさい」

雪姉が一言発しただけで、それまで喧しかった結衣、材木座、板橋先輩は黙ってしまった。

すげーな……。この3人をたった一言で黙らせちゃったよ……。

マジ、雪乃お姉ちゃん超怖ぇ……。

「板橋くん。聞かせてくれないかしら？姉さんが何故、貴方達のスポンサーになったのか」

雪姉は、いつになく真剣な顔で板橋先輩に聞いていた。

「え？ああ～……。詳しくは知らないけど、ハルさん先輩から杉並の方に連絡してきたらしい……て、事ぐらいしか……」

どうやら板橋先輩も、詳しくは知らないようだった。
「……そう。わかったわ」
雪姉はそう言って、ポケットからスマホを取り出すと何処かへ電話をかけた。
このタイミングで電話をする相手は……まぁ、決まってますよねぇ。
「あ、姉さん？ちょっと聞きたいことが……え？！ちょっと待って……」
相手が電話に出て、一方的に切られた感じだった。
「ふぅ。あの女狐、出たと思ったら『雪乃ちゃん？あ、今すっごく忙しいからぁ～、まったねぇ～♪』と言われて切ってしまったわ……」
陽乃さんに直接問いただそうとしたのだろうが、上手くはいかなかったらしい。
てか、陽乃さんのモノマネ無駄に上手いな……。
さすが姉妹なだけはある。
「あの……。雪ノ下さん？俺と材木座は帰ってもよろしいでしょうか？」
さっきの雪姉にビビってしまったのか、板橋先輩は腰が引けていた。
「ええ、構わないわ」
雪姉が答えると、板橋先輩と材木座は「へへ……どうも～」なんて言いながら去って行った。
「比企谷、ちょっと話がしたいんだがいいか？」

材木座達を見送っていると、葉山先輩が俺に話し掛けてきた。
「……なんすか？」
「はは……。そんな、あからさまに嫌そうな顔しないでくれよ」
いや、俺あんたの事が嫌いなんだけどね……。
「元々こんな顔なんですよ……。で？話ってなんすか？」
「君は今回の件、どうするつもりだい？」
「どうもこうも、まだノープランですよ。陽乃さんが絡んでる事、今さっき知ったばかりですしね……」
正直、杉並先輩の仲間入りしなくて良かったわ……。
仲間に入っていたら、陽乃さんに弱味を握られかねないし、とんでもない命令されるかもしれなかったもんな……。
結衣と雪姉に感謝だな。うん。
「そうか。比企谷とは中学からの後輩で今まであまり接点がなかったが、雪ノ下さん……会長から君の事を聞いている。勿論、噂の真相も……」
そう言うと、葉山先輩は何故か悔しそうに歯をくいしばり俯いてしまった。
噂……というのは、小学校、中学校時代に結衣や雪姉を庇って、俺が学校中に悪い噂が立った事だろう。

葉山先輩は、おそらく今回も同じように結衣や雪姉を庇う為に、俺が悪者になることを危惧しているのかもしれないが……。

「葉山先輩が雪姉に何を聞いたのかは知りませんが、噂は事実なんで真相も何も無いですから」

気だるそうに俺が言うと、葉山先輩は顔を上げ納得がいってない顔をしていた。

「……君は本当に、それでいいのか？周りに誤解されたままで……」

「さあ？誤解ってのが何の事か知りませんが……俺は、解って貰えてる人に解って貰えれば、それでいいんだと思いますよ？」

「え？」

「あ、いや……。ま、まぁ誤解もひとつの『解』なんだし、他人がどう思おうと知った事じゃないって事っすよ」

喋っているうちに何だか余計な事を言ってしまった。

そっぽ向いて頭をポリポリしていると、結衣と雪姉が視界に入る。

二人とも、ちょっと嬉しそうに微笑んでいた。

なんか無性に恥ずかしくなってきたので、俺はクルッと反転して「じゃ、帰ります」と言って歩き出した。

「ちょっ！ヒッキー待って、一緒に帰るって言ったじゃん！」

慌てて結衣が追いかけてくる。
「うるせぇな。嫌だって言っただろ？」
「むぅ～。いいもん！勝手に着いていくし！それなら文句ないでしょ？あたしの勝手だし」
「……勝手しろ」
「うん。勝手にする！」
嬉しそうに笑って着いてくる結衣の後ろの方で、雪姉とまゆき先輩が話している。
「あれは素直じゃないねぇ、さすが雪乃の弟って感じ？」
「高坂さん？それは、どういう意味かしら？」
「どういうって……。てか、その笑顔ホント止めて。ね？すごく怖いから……」
怖いもの知らずの風紀委員長をもビビらす雪姉の笑顔に周りも凍り付いていたが、既に戦線離脱している俺と結衣は足早に帰宅して行くのであった。

Vol. 5

杉並先輩達や生徒会の連中と色々あったが、まぁとりあえずやっと校舎を出て校門まで来た。

後ろからは結衣がトテトテ着いてくる。

今朝みたいに手を繋ぐなんて事もなく、付かず離れずの距離だ。

「はぁ～…。何か午前中ずっと寝ていた筈なのに、スゲー疲れてんのは何でだろうな？」

黙って歩くのもなんたがなぁと思い、一人言のようにボソッと呟く。

「うん……。あたしも、ちょっと疲れちゃったかも……」

2、3歩後ろを歩く結衣をチラッと見ると、確かに少し疲れが出ているようだった。

「そういやぁお前、杉並先輩が嫌いなの？」

普段の結衣だったら、あんなに敵意剥き出しの表情は見られないから気になっていた。

「え？う～ん。まぁ、好きではない……かな？」

なんとも歯切れの悪い答えが返ってきた。

性格が優しいし結衣らしい答え方だ。

「ま、雪姉を苦しめてる張本人だからな。お姉ちゃん大好きな結衣からしたら敵だわな……」

「えへへ。うん、お姉ちゃん大好きだよ♪真面目で優しくて可愛いし、従姉だけど本当の姉妹って感じかな?」

嬉しそうに微笑む結衣。

そんな雪姉に心底憧れてるんだろうな。

ふと、顔を上げると、夕陽に照らされた桜の花びらが綺麗に舞っていた。

１２月の日照時間は年間で最も短く、夕方４時前だというのに辺りは暗くなりつつあった。

「ヒッキー。ちょっと寄り道してかない?」

「あ?コンビニか?」

「違う違う。桜公園に行きたいなぁ……って」

「このクソ寒いのに?」

今歩いている桜の並木道を真っ直ぐ行けば一色家と由比ヶ浜家に着くのだが、並木道の途中に桜公園の方に向かう道がある。

そこを行けば、すぐに桜公園に着くのだが、あそこって海が近いから風が強いんだよ

な……。
「うん。なんか、公園の広場に新しく屋台のクレープ屋さんができたんだって！ヒッキー甘いの好きでしょ？」
「だからって、寒いのに無理して食いに行くほどじゃないんだが？」
「い、いいじゃん！行こうよ！暗くなる前に！」
結衣が駄々をこねてるいと、T字路が現れた。
このまま真っ直ぐ歩けば、暖房の効いたあったかい我が家がある。
右に歩けば、極寒の桜公園に行く道だ。
俺は迷わずスタスタと我が家に向かって歩いていると、襟首を結衣に引っ張られた。
「ぐはっ！ちょっ！く、苦しい……」
結衣はすぐ襟首から手を離すと、すかさず俺の腕を取って公園の方に歩き出してしまった。
「一人で食べるより、誰かと一緒に食べた方が絶対においしいもん！だからヒッキーも行くの！」
「なら雪姉とか友達と行けばいいじゃねぇか」
「あ、あたし今食べたいの！今はヒッキーしかいないから！」
顔を赤く染めながら、結衣は抗議してくる。

「俺は早く帰えりたいんだけどな……」
「帰っても、どうせゲームとか漫画とかでしょ？いいから行こう！」
今日の結衣は何だか強引だった。
今朝見た夢が原因なのかもしれない。
後悔したくない……か。
あれは、どういう意味で言ったのだろう？
俺の手を取る結衣を見ながら思っていると、ハッと気付いてしまう。
「分かった分かった！行くから手を離せ！」
やっぱり手を繋ぎながら公園に行くなんて、恥ずかしすぎて死ぬ！
「ダメ！ヒッキー絶対逃げるもん」
強引に手を引っ張られながら、それでも何度か抗ってみるが、抵抗しても無駄だと気付いた俺は、諦めて大人しくクレープ屋に着いていくしかなかった。
公園に着くと、すぐに噴水のある広場にでる。
その広場の端っこの街灯の下に１Ｂｏｘの車を改造した、クレープの屋台があった。
１Ｂｏｘカーは、派手に赤と白のストライプカラーで、車の後部座席の窓がある辺りから店員が顔を覗かせ、中で注文を受けつつクレープを作っていた。
客足は上々のようで、学校帰りの女子高生が１０人ぐらい列を作り順番待ちしてい

る。

「……なぁ、俺もあの中に混ざらないとダメなの？」

女子高生の集団の中に一人ぽつんと俺という異物がいると思うと、正直スッゲー居心地が悪い……。

しかも、結衣と手を繋いだままとか……。

どこのリア充だ！って話しだ。

「え？あ、そうだね……」

結衣も、あの列が女子しかいない事が分かったのか、少し考えてから俺の顔を見た。

「じゃあ、あたし買ってくる。ヒッキーは何がいい？」

「別になんでもいい……。俺、あそこのベンチで待ってるわ」

そう言って公園の入口付近にあるベンチを指差す。

「うん、分かった！ヒッキー逃げちゃダメだからね！」

「ここまで来て逃げねぇよ……」

結衣は念を押すように言って、タタタタ……と軽い足取りでクレープ屋に向かって行った。

俺はベンチに向かい腰を降ろすと「ふぅ～……」と一息を吐く。

結衣がクレープ屋の列に並ぶのを眺めながら、クリスマスパーティーの事を考える。

雪姉はどうするつもりだろ？
杉並先輩や板橋先輩だけでも厄介なのに、陽乃さんまで気を回さなきゃいけない。
そもそも、杉並先輩達はクリスマスパーティーで何をやらかそうとしているんだ？
リア充どもに正義の鉄槌を喰らわす！なんて言っていたが、具体的にどうするかまでは知らない。
それは雪姉も同じで、だから俺に杉並先輩のスパイを頼んだ訳だし……。
今までの事を考えると、間違いなく何かとんでもない悪戯するに決まっている。
今度は
あー、そういや、人形劇の主役もやるんだったけ……。
ベンチの背もたれに腕を回して空を見上げる。
夕焼けの空には、何匹かのカラスが公園の上空をグルグル旋回していた。
ぼーっとカラスを眺めていると、また眠気が襲ってきた。
「やばい……。こんな寒い所で寝ちまったら、確実に風邪ひくな」
頭を振って無理矢理に眠気を追い払い、公園の広場全体を見渡すことにする。
結衣はクレープ屋の前でチラチラこちらを気にしながら列に並んでいる。
あれは、もう少し時間がかかるな。
つか、こっち見んなよ。逃げねぇよ。

目を噴水の方に向けると、小学生数名がサッカーボールで遊んでいる。
こっちの方にボール飛ばすんじゃねーぞ、と念じながら視線を公園の入口の方に向けると、何だか見覚えのある人が公園に入ってきた。
亜麻色にショートボブの髪、中学生と言われれば本気で信じてしまいそうな体型。
我が風見学園高等部の校長にして俺の保護者である、一色いろはさんが神妙な顔で園内に入ってきた。
いろはさん？クレープでも買いにきたのか？
でも、あの雰囲気はクレープを買いに来たって感じでもなさそうだよな……。
いろはさんは俺や結衣に気付かないまま、公園の奥の方へ行ってしまった。
あっちの方って、確か『枯れない桜』がある方だよな？
あんな所に一人で行って何を？
気になって声を掛けようと立ち上がる。
「あーっ!!ヒッキー逃げちゃダメって言ってるのにっ!!」
クレープを両手に持って叫ぶ結衣は、慌てた様子でこちらに向かってくる。
「ば、馬鹿！大声出すな！恥ずかしいだろうが！」
ほら、サッカーしてたガキも、今もクレープ屋の前で並んでる女子高生も、散歩しているお爺ちゃんお婆ちゃんも、皆こっち見てるじゃねぇか！

「ヒッキーが逃げようとするからだし！」
「違うっつーの。今、いろはさんが公園の奥の方に行くの見掛けたから、声かけようと思っただけだよ」
「え？いろはさん？」
結衣は振り返って広場を見渡すが、既にいろはさんは公園の奥に行ってしまっていた。
「……いないじゃん」
ムスッとした顔で俺の顔を見る結衣。
「いや、ホントにいたんだよ。枯れない桜の方に行ったみたいだけど……」
「もう！いろはさんが一人で、あんな淋しい所にいくわけないし！ヒッキー嘘ついたから、罰としてクレープなしね！」
「いや、嘘じゃねぇから……。てか、そのクレープ、二つともお前が食べるの？」
結衣が持っているクレープを見ると、よく見かけるサイズより一回り大きいサイズで、生地の中の生クリームは生地から溢れんばかりの量だった。
さすがの甘党である俺でも、あの量の生クリームが入ってるクレープ二つ食うのは無理な気がする……。
つか、普通に胸焼けする。

「これくらい余裕だもん」
何の躊躇いもなく、平然と言ってのける結衣。
女の子って不思議だね……。
ま、いろはさんの事は帰ってから聞けばいいか。
仕方なしに、またベンチに腰を降ろすと結衣も俺の右側に座ってくる。
結衣がベンチに腰を降ろすと、フワッと柑橘系の良い香りが鼻腔をかすめる。
……ち、近い。
お互いの肩と肩がぶつかりそうな距離に結衣が座っている。
いかん、結衣ごときにドキドキしてきた……だと？
気のせいだ！うん、気のせい！
俺は、さりげなく数センチほど横にズレる。
しかし結衣も、俺がズレた分だけこっちに寄ってきた。
「ちょっ、お前何やってるんだよ？そんな近づくな！か、勘違いしちゃうだろ!?」
「う、うるさい。ヒッキーは、あたしが美味しそうにクレープを食べてる所を見てればいいの。それが罰なんだから」
ムスッと少し赤い顔で言う結衣だが、それって俺がここにいる意味ないよね？
何が楽しくて、お前がクレープ食ってるところを見てなくちゃいけねぇんだよ……。

頭の中でブツブツ文句を言ってる間に、結衣は左手（俺側）のクレープをパクッと食べ始めた。
「う～ん美味しいぃ～」
幸せそうな顔でクレープを頬張る結衣をジト目で見ていると、ふと純一さんの声が思い出される。
『甘いお菓子には人を幸せにする力があるんだよ』
いつだったか覚えてないが、確かに純一さんに言われた気がする。
結衣は、あっという間にクレープを一つ平らげてしまっていた。
「ん～。ブルーベリー美味しかったぁ。よし、次はストロベリー！」
「お前、夕飯大丈夫なのか？そんなに食って……」
ストロベリー味のクレープを口にしながら、結衣は俺に顔をむける。
「大丈夫。甘い物は別腹だし」
「……太るぞ？」
俺がボソッと呟くと、結衣はクレープをかじったままピタッと停止してしまう。
「だ、だだ大丈夫だし！あたし太らない体質駄し！」
汗をダラダラ流しながら、ギギギ……と、あさっての方向を見る結衣。
「めっちゃ動揺してんじゃねぇか……」

結衣は「むぅ〜」と唸り声をあげながら上目遣いで睨んでいる。
「……やっぱヒッキーにあげる」
そう言って結衣は、自分の口をつけたストロベリー味のクレープを俺の顔の前にズイッと持ってくる。
「いや、いらねぇし……」
そんなの食べたら味がわからなくなるだろ。
「いいから食べる！せっかく買ったのに、勿体無いじゃん！」
「だから、そういう問題じゃなく……あぐっ!?」
このアマ、喋っている途中で無理矢理クレープを口に入れてきやがった！
仕方なく、俺はモグモグとクレープを咀嚼する。
なんだか顔が熱い……。
「あ、ごめん。苦しかった？」
「い、いや……。そういうんじゃねぇし……」
「？でもヒッキー、顔が赤いよ？」
結衣は分かっていないのだろう。
可愛く小首を傾げながら赤くなっている俺の顔を見ている。
「あーーーっ!!不純異性交遊しる!!」

「「え？」」

突然、大声を上げてズダダダダー！と突っ走ってくる人影が見えた。

俺と結衣は同時に声のした方に目を向けると、いろはさんが物凄い形相で突っ走って来た。

「い、いろはさん!?」

「枯れない桜の方に行ったんじゃ……」

俺と結衣は驚き戸惑っていたが、いろはさんはスルーして俺に食って掛かる。

「ハチくんは、何で結衣ちゃんとラブラブ間接チューしてるの？こんなに可愛い保護者がいるのに！不純異性交遊ならわたしが教えて……」

「おい、ちょっと待て。そこの合法中学生の保護者」

俺は顔を左手で押さえながら、右手で制止のポーズを取る。

この人、何を結衣の前で言おうとした？

「ごーほー中学生？」

結衣が解らない顔をしている。

仕方がない、教えてやろう。

「乳臭い中学生（ガキ）にしか見えない大人の事だ」

「が、ガキじゃないもん！わたしは、ハチくん達よりずぅ～っと大人なんだからね！」

顔の前で両手をグーにして、上目遣いでプンプンしているいろはさん。
「いや、俺いろはさんが大人っぽいことしてるとこ、仕事意外見たこと無いんですけど？」
学校ではしっかり校長先生していると思うが、私生活では基本グータラなんだよな……この人。
煎餅かじりながら時代劇見て、飽きたら昼寝。稀にキッチンでお菓子なんかを作ってる。
そして、何かある度に俺に絡んでくるのだ。
「ぶー。ハチくんが見てない所でちゃんとしてるもん。ハチくんの目が節穴なの！」
ホントにこの人は、いちいちあざといんだよな……。
今も自分が相手に一番可愛く見える位置で上目遣いしながらプンプンしているし……。
「はいはい。で？ちゃんとしている筈のいろはさんは、仕事サボって桜公園で何をしてるんですかね？」
「むっ。サボってなんかないもん。見廻りだよ！放課後の公園で未成年の男女が、イチャイチャしてたり間接チューしてたりしないように見廻ってるの」
「あ……。か、間接ちゅー……」

結衣が小さく、ぽしょっと呟く声が聞こえた。
ガハマさん、今頃気づいたんすか……。
顔を真っ赤にしてうつ向きながら、空いている手でシクシク自分のお団子頭を弄っていた。
「いや、イチャイチャしてねぇし、クレープは結衣が無理矢理俺の口に突っ込んだだけっすよ?」
「ふ～ん。結衣ちゃんの名前を寝ながら言ってるハチくんに、そのセリフは説得力ないと思うなぁ～」
いろはさんはジト目で今朝の事を言ってきた。
「さ、さぁ?なんの事っすかねぇ～」
いろはさんから顔を反らし、とぼける事にした。
「ひ、ヒッキー……あ、あたしの夢……見てたの?」
結衣は恥ずかしそうな、困ったような顔で俺に聞いてくる。
「ば、ばっか。何で俺がお前とイチャイチャする夢見なきゃなんねぇんだよ」
必死に動揺している事を隠しながら、俺はムスッとした顔で答えると、いろはさんが雪姉と同等の冷たい声音で呟いた。
「へぇー。結衣ちゃんとイチャイチャしてる夢見てたんだ?ふ～ん……」

「あ、あーーー!!ヒッキー、早く帰ろうよ!」
結衣が突然、大声を上げ立ち上がり俺の腕を掴むと、勢いよく引っ張られた。
「ちょっ、結衣ちゃん!まだ話し終わってないよ!」
「ご、ごめんなさい!今日あたしが夕食の準備するんで、先に帰ります!」
「「……え?!」」
いろはさんと俺の声が重なる。
いろはさんは絶句したまま立ち尽くし、俺は結衣に引っ張られるまま言葉を失っていた。
あー……。そういえば、昼休みにそんな話しがあったけ……。
俺と結衣が公園の出口に差し掛かると、後ろの方から「き、聞いてないよぉ～!」と、いろはさんの叫び声が聞こえてきた。